



蒲田の飲食店を振り返って

有田 尚史

私はキリンビールの蒲田飲食店の担当として十二年前に赴任しました。

当初は、東京の二三区内にもかかわらず個人的な蒲田という街にびっくりしました。

お得意先に初めて挨拶しても名刺を受け取ってもらえなかったり、ランチ終了時に訪問して、お客様がいるのにと怒られたりとなかなか打ち解けていただけない経営者が多くいらっしやいました。

ところがしばらく通い続けると、必ず「有田さん」と呼ばれる。決して「キリンさん」とか「営業さん」とは呼ばれません。お店にお客様がたくさんいらっしやっても平気で商談してくださいさる。

店主の方々は、皆個人的で人情深く下町てきだなと思いました。都内はどこも競争が激しい反面、チェーン店ばかりが増加して個性が失われている中で本当に面白いエリアだと思いました。

担当して一年後にある飲食店で鍋谷さんと出会い、蒲田モダン研究会に参加するようになりました。

それは、この蒲田の街の特徴はどうして育まれたのか非常に興味があったからです。そしてこの十年間の会員の皆様のレポートから蒲田の知り納得しました。

黒澤むらの独自の文化形成の理念や、西洋文化に迫り着け追い越せで素晴らしい製品を創り出した大倉陶園・各務クリスタル・高砂香料をはじめ様々な町工場の起業精神や情熱を知りました。また、良い製品を作るパワーとともに当時の都心とは違う蒲田独自の自由な気質を感じました。

そして、その町工場の元気を支えていたのが、映画館や飲食店だったのではないのでしょうか。

映画館は現代よりもっと重要な娯楽であり、蒲田にも数多く存在したと聞きました。若い工場の人々も訪れたと思います。そしてその周辺の飲食店に訪れたと思われれます。

安くて旨いものを提供する店が蒲田に多い理由なのだろうと思っています。地元で愛される庶民的な店が多い理由だとも思います。ところで蒲田の気質は分かったのですが、過去の話どころではなく、蒲田モダン研究会のメンバーが元気で自由で個性的だったことに驚きました。

毎月の会合後、特に私がお誘いするわけでもなく、皆さん蒲田の街へ繰り出して酒を飲みつつ議論を交わす。これこそ、今も変わらない蒲田気質そのものだと思います。

皆さんと一緒に黒澤貞次郎の真似をして銀座でキュウリを食べながらビールを飲んだり、小津安二郎に蒲田ですき焼きにカレー粉を入れて食べたり、当時のことを調べるだ



けでなく雰囲気を再現を工夫する取り組みも楽しく参加させていただきました。

蒲田の気質は過去のものではなく、これからも新たな街づくりの源となつてほしいと思います。

最近、テレビドラマやバラエティー番組でも蒲田は話題に上ります。少し、おかしなブームではありますが。

私が蒲田モダン研究会で感じた蒲田のイメージは二三区の中では少し外れの位置にあるがゆえに、町工場が明治以来日本の文化の発展に寄与してきた街です。

しかし、昨今話題にのぼる蒲田は流行からはずれたレトロで猥雑な街です。

それでも、見る角度によつてさまざまな顔を見せる。パワフルな街であることには間違いありません。このパワーをさらに広く世に発信できたら幸いです。